

一〇年代文化論

さやわか

2010年代の若者文化は、
“**残念の思想**”
によって作られた!?

気鋭の著者が、ジャンル横断的に展開する、
希望のポップカルチャー論!

一〇年代文化論

さやわか

星海社

46



若者文化なんてどうでもいい

この本のテーマは「2010年代の若者文化」だ。

今この本を手を取ったあなたが、そんなものに興味があるかどうか、僕にはわからない。あなたはひよっとすると「若者文化なんかどうでもいい」と思っているかもしれない。今どきの若者が好む文化なんてアニメとかゲームとか漫画とかアイドルソングとか、まあ、いい大人が真剣に考えるようなものではない。あなたはそう考えているかもしれない。

しかし僕はいま、「2010年代の若者文化」について考えることが必要なんじゃないかと、考えている。なぜかというところ今の若者文化を知れば、今の日本がどういう状況になっているのか、すぐく理解しやすい気がするからだ。つまり僕は、この本を読めば、今の社会が昔とどう変わったのかわかると思っている。

今の日本は、昔と全く違う社会になっている。しかし、どんなふうに変ったのか、い

つから変わったのか、うまく言える人は少ない。

でも、今の若者文化を知れば、それがわかると僕は思う。だからこそ、あなたにこの本を読んでもらいたいと思っっている。

ところで「2010年代の若者文化」というテーマは、自分で言うのも何だが、ちょっと奇妙なところがある。

まず第一に、いま僕がこの本を書いているのは2014年なのだ。つまり「2010年代」はまだ、始まって4年しか経っていない。なのに僕は「2010年代」全体を総括するような本を書くというのである。一体どういうことなのか。

それから、「若者文化」という言葉にも、ちょっと引かかかものがある。

そもそも若者文化という言葉を、最近はかつてほど聞かなくなつた。いや、言葉としては存在するだろうが、世の人があまり関心を持っているとは言えない。だからこそ、僕は「この本のテーマは若者文化についてだ」と書いたとしても、あなたに「そんなこと、興味ないよ」と言われてしまうかもしれないと、心配になるのだ。

しかし、ではなぜ人々は若者文化に関心を持たなくなつてきたのだろうか。

つい20年ほど前には、若者文化といえはカルチャーの花形のように語られた。小説、ポピュラー音楽、映画、漫画、アニメ、舞台、ゲーム、アート、スポーツ、そのほかいろいろ。旧世代には理解できない、新しい感性を持った若者が担っていく文化に、人々は注目していた。そうしたものが時代を切り開き、新しい文化を作っていると考えられてきた。

ところがいま、若者文化という言葉自体が、あんまり注目されなくなっている。そもそもアニメとかゲームとか、今の若者が楽しんでいるものは文化じゃないと言われている。音楽でも、今のバンドは昔に比べて薄っぺらい音楽をやっていると言う大人は多い。

しかし、だとすると今の日本人って、自分以外の人たち、特に若い人たちが、どんなことに関心を持っているのか、全く興味がないということになる。

それはあまりいいことじゃないだろう。

若者と流行、そして若者文化

あるいは、「若者文化」という言葉はナンセンスなのだという人もいる。

社会学者の古市憲寿ふるいちのりとしは、『絶望の国の幸福な若者たち』（講談社、2011）という本で、国の進退が危ぶまれ出世のチャンスも少ない今の日本の若者は、しかし自分たちのことを

「幸せだ」と感じていると主張している。そしてそもそも、年長者が若者に対して変に期待を寄せること自体、自分勝手な態度なのだ、皮肉を差し挟みながら書いている。要するに「近頃の若者は……」と苦言くげんを呈する年長者もウザいが、「君たち若者が未来の日本を作る」などとハツパをかけようとするおじさんたちも同様に面倒だ、というわけである。

そして古市はこの本の中で、いわゆる「若者文化」についてもわずかに言及している。

(中略)「若者が流行を作り出すトレンドセッター」という切り口自体、一九八〇年代に作り出されたフィクションである。当時の「若者」は人口ボリュームとしてもそこそこ大きかったし、「若者」当人も自分たちが流行発信源という自負があったのだろう。

この言葉もやはり皮肉めいている。つまり若者文化というのは人口の多かった若者をおだてて、自分たちが流行をリードしていると思わせ、「お客様」になってもらおうという、マーケティングやメディアの主導による策略だったというのである。

いくぶん陰謀論めいた話だが、一定の説得力はある。たとえばファッションシーンやJ-POPの動向などに照らし合わせて考えれば「なるほど」と思えるかもしれない。

若者は流行を作り出さない？

ただ、僕は彼の文章を読んで、全然違うことを考えていた。

過去、若者文化の大きな盛り上がりと言えば、僕は70年代初頭のヒッピー文化を思い出す。文明批判、戦争批判などの精神から自然回帰を訴え、音楽や文学、映画、演劇、ファッションなどの表現からライフスタイルまで、当時の世相風俗に大きな影響を及ぼしたムーブメントだ。今でも、70年代と言えばヒッピー文化を思い出す人が多いだろう。

ちなみに、そのヒッピー文化の象徴とされるのが、1967年の夏、サンフランシスコ周辺へ自然発生的に10万人もの若者が集まったという「サマー・オブ・ラブ」という現象だ。これはアメリカの話だが、当時はそれが最高にカッコいいものだったので、日本の若者にもヒッピー文化は流行した。

さて、こういう自然発生的な若者の流行を見ると、必ずしも「若者が流行を作り出すというのはフィクションだ」とは言い切れない気がする。そもそも、古市はそれを80年代に作り出されたフィクションだとしているが、これは70年代の話だ。

でも、70年代なら若者が文化を作っていたけれど、80年代以降にそれが商業化して「フ

イクシヨン」になったと考える人もいるかもしれない。

しかし例えば、90年代から日本でもポピュラーになったDJカルチャーやクラブカルチャーなどは、これもヒッピー文化と同様に欧米のまねごとだったかもしれないが、それでも若者が牽引けんいんした文化だったように思う。

実際、狭い店内でレコードをかけて客を踊らせることは風営法に違反することで、大人たちから全く認められた行為ではなかった。最近も、警察が厳しくクラブの取り締まりを行って、営業停止に追い込まれる店が多くなっている。

つまり、こういうムーブメントもまた自然発生的なものだ。「若者が流行を作り出すというのはフィクションだ」とは、言い切れないのではないだろうか。

そして、そもそも流行の仕掛け人がいて、次々に新しい商品を若者に買わせようとしたとしても、その商品が確実に売れるわけではない。常に陰謀によって流行が作られているわけではないのだ。言い換えると、売れたものには結局、仕掛け人には予測できないようなその時代に似つかわしい理由、同時代性があるのだと言っているだろう。つまり、仕掛けられたものを買う方にも、それを買う理由がある。だから「若者が流行を先導しているというのは幻想だ」とだけ言って切り捨てるのは、ちょっと話が単純すぎる。

なぜ2014年に2010年代を語るのか？

ではこの本のテーマである10年代の若者文化とは、どこにあるのだろうか。

それを考えるにあたって、僕はふいに、先ほど書いたヒッピー文化の話が、なぜかとても気になっていた。あの話は、実は僕が2007年に『ユリイカ』（青土社）という雑誌のコラムに書いた内容とかぶっている。今、読んでみたらけっこう僕がこの本で書きたいことをそのまま書いてくれていたので（さすが自分だ）、丸ごと引用しよう。

唐突に気付いた。ヒッピーってしばしば七〇年代的なものとして扱われるんだけど、実際のところ一九六七年には文化的なピークを迎えるんだよね。いや正確に言えば七〇年代の文化として語られるもののはほとんどは六〇年代の終わりには存在したんだ。七〇年代に限った話じゃなくて、十年単位の時代史をつぶさに見れば各年代の後半には次の年代を象徴するものが現れている。八〇年代的なものに見えるニューウェーブは七〇年代後半に成立したし、クラブカルチャーも八〇年代には存在した。音楽の話ばかりと思っただけで、うんざり口年代をすっかり席巻したインターネットを考えよう。あれは一九九七年から

爆発的に普及し始めたのである。

「ならば今年からの三年間で次の十年を象徴するものが登場する！ 先見の明とはここに注がれるべきなのだ！」という考えにとりつかれて、ここんところ新奇なものに触れるのが殊のほか楽しい。だが人に話すと「十年単位に囚われているだけでバカバカしい」という。曰く、人の営みは十年でうまい具合に切り分けられるわけではない。次の十年を象徴するものが前後して現れるのは、まさにその十年という枠が枠として働いていないだけで、特にキャツキャツって面白がるほどの話ではない。

彼の言うことは何だかもっともらしくて実につまらない。時間が実際に切り分けられるかなんてどうでもいい。それ以前に人間は十年単位っていうのを意識しうるのだから。意識すればちゃんと影響されちゃったりするのが人間だ。今後三年に現れる何かが大事だと考える奴は、その何かを本当に大事にして次の十年に開花させるかもしれないのである。

手前勝手な解釈だけに基づいて過去の出来事を並べ、そこから未来に至る過程の中に自身を位置づけること。歴史とは常にそういう種類の虚構だ。人はその物語を信じ、影響されて、次代を作る。すごいことだ。その物語がただの物語に過ぎないなんて、指摘

するだけ野暮である。

『ユリイカ』の2007年4月号に書いたこのコラムに、僕は「2010年代が既に始まっている」というタイトルを付けていた。

このコラムは僕にとつて、言ってみればひとつの予言だった。「2010年代について考えたければ、2007年の今まさに登場し始めているものが大事なのだ」と、僕は予言している。この時点で、その大事なものが何なのかをピタリと言い当ててみせない自分のヘタレさにはいくぶんガツカリさせられるが、しかし言っていることは正しかったと思う。そう、だからこそ僕はこの本で、2014年にして2010年代の若者文化を語ることができると思ったのだ。

この2014年に盛況を迎えている若者文化は、みんな2007年頃には登場している。だから僕はこの本で、2000年代後半をつぶさに眺めながら、2010年代の文化のコアを探り出したいと思っている。いわばこれは、僕が行った「予言」に対する「答え合わせ」の本なのだ。

1999 05/30 大型掲示板「2ちゃんねる」が開設される。

2004 03/14 2ちゃんねるで「電車男」が投稿され始める。大人気となり、同年には書籍化。

2004 06/30 眞鍋かをりがブログを開設、一人称「オイラ」という独特の文体で人気となる。初代「ブログの女王」と呼ばれ、以後は翌年にかけてブログがブームになっていく。

2004 09/12 ヴェネチア・ビエンナーレ「おたく…人格Ⅱ空間Ⅱ都市」展が開催される。

2004 11/05 初めての日本語版ポーカーロイド『MEIKO』発売される。

2004 11/17 波田陽区がシングルCD『ギター侍のうた』を発売し、オリコン4位となる。

2005 04/23 動画サイトYouTubeが開設され、初めて動画が投稿される。

2005 12/01 カプコンのPSP用ゲーム『モンスターハンターポータブル』が発売される。当初は注目されなかったが口コミでゆっくりと売れ続け、ミリオンセラーを達成したのは発売から2年後。

2006 02/06 梅田望夫『ウェブ進化論』が出版される。サブタイトルは「本当の大変化はこれから始まる」。

2006 02/07 ゲームを中心としたソーシャルネットワーク「モバゲータウン」が開設される。

2006 02/16 YouTubeが著作権侵害を厳粛に取り締まるようになり、アメリカのテレビ番組「サタデー・ナイト・ライブ」の動画が削除される。

2006 04/02 テレビアニメ『涼宮ハルヒの憂鬱』の放映が開始される。

2006 05/24 岡田斗司夫がロフトプラスワンでトークイベント「オタク・イズ・デッド」を開催する。

2006 07/13 アトラスのゲームソフト『ヘルソナ3』発売される。

2006 12/12 一「二」三「動画(仮)」が開設される。翌年1月に「一」「二」「三」動画(β)へバージョン移行し、大きな人気を獲得していくことになる。現存する最古の動画は2007年3月6日に投稿された「新・豪血寺一族―煩惱解放―レッツゴー!陰陽師」。

2007 01/21 ニ「三」動画に「歌ってみた」タグが作られる。

2007 03/15 『モンスターハンターポータブル』シリーズの第二弾、『モンスターハンターポータブル 2nd』発売。発売後1カ月以内にPSP用ソフトとして初めてのミリオンセラーを達成する。

2007 03/29 手軽にネット放送が行えるウェブサービス「Ustream」が開設される。

2007 04/08 テレビアニメ『らき☆すた』が放映開始される。

2007 08/14 お笑い芸人の千原ジュニア、三鷹の森ジブリ美術館が配給するアニメーション映画『アズールとアスマール』のトークイベントで「残念な兄」千原せいじについて言及する。

2007 08/31 クリプトン・フューチャー・メディアがキャラクター・ボーカー・シリーズの第一弾「初音ミク」を発売する。

2007 09/12 Perfumeのシングル『ポリリズム』が発売され、オリコンチャートで週間7位のスマッシュヒットとなる。

2007 12/19 ニコニコ動画の姉妹サービスとして、Ustreamのように手軽なネット放送が行える「ニコニコ生放送」が開設される。

2008 01/17 中央教育審議会総会において幼稚園、小学校、中学校、高等学校および特別支援学校の学習指導要領等の改善についての答申が取りまとめられる。

2008 01/19 葵せきな『生徒会の一存』の第一巻が発売される。

2008 03/08 2ちゃんねるに「残念な美人とか残念なイケメン」という言葉が投稿される。調査した限りではこれが2ちゃんねる上だともっとも古い記述。

2008 04/16 岡田斗司夫が2006年のイベント内容を元にした書籍『オタクはすでに死んでく』を刊行する。

2008 04/23 Twitter 日本語版が開設される。当時Twitterは海外で急成長しているサービスだったが、まだその先行きが疑問視されているタイミングではあった。

2008 06/01 ニコニコ動画に「残念な美人」タグが作られる。

2008 06/08 秋葉原で通り魔事件が発生。

2008 08/10 伏見つかさ『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』の第一巻が発売される。

2008 10/02 後に大きく成長するネット上のコミック閲覧サイト「ガンガンONLINE」が開設される。

2009 01/02 2ちゃんねるがシンガポールの会社に譲渡される。

2009 04/17 中川淳一郎『ウエブはバカと暇人もの』が刊行される。サブタイトルは「現場からのネット敗北宣言」。

2009 06/01 Imediaのインタビュー記事「日本のWebは『残念』梅田望夫さん」が公開される。

2009 08/25 平坂読『僕は友達が少ない』の第一巻が発売される。

「残念」の使われ方が変わっている

では、僕はこの本で「2010年代の若者文化」をどのようなものと語ろうとしているのか？

これについては最初に結論を書いてしまおう。それは「残念」という思想に基づいた文化だと思っている。

最近、僕は「残念」という言葉が目についてしかたがない。言葉自体がというより、その使われ方が、ちよつと変わっている場合が多いと思うのだ。

たとえば、僕がたまたま買った雑誌『TV Bros』（東京ニュース通信社）2013年No.23で、昨年大ヒットしたNHKの朝ドラ『あまちゃん』の巻頭特集をやっていた。そこでドラマのチーフ演出である井上剛いのうえつよしがインタビューを受けていて、その記事の見出しにこう書いてあった。

「残念」という言い方の中にもものすごい愛情があるドラマをやりたかった

つまり井上も、「残念」という言葉の使い方に通常ならざる思いを込めているというわ

けだ。さらにインタビューの中身を読んでも、ドラマのモデルとなった岩手県久慈市くじしに、脚本をつとめた宮藤官九郎くどうかんくろうと行ったときの話として以下のように書いてあった。

宮藤さんや他のスタッフと久慈市に初めて行ったときに、「なんか残念ですよね！」って宮藤さんが言ったんですよ。悪気のある言い方じゃないですよ。笑いながらすごく愛着を持って言うんですけど。例えば、その町で売ってるお土産がありますけど、実際はどここの町にもあるようなものなんです。「ちよつと買わないなあ……」みたいな。だけど一生懸命盛り上げてる感じがあって、そのことを宮藤さんは「残念ですよね！」って言ったんですよ。この感覚はすごくいいな、と。「全国ネットの公共放送で『残念』という感じを言っても、宮藤さんの書き方だったらちゃんと伝わるんじゃないか」と思っただんです。「田舎は風光明媚ですよ、素敵なところですよ」と言っても、たぶんほとんどの人はその嘘臭さに気付いてますよね。そうじゃないよな、と。宮藤さんの中では、「本当に好きだ」というのを伝えたいときに、そのまま「好きだ！」と言っても伝わらない、という感覚が根底にあると思うんですよ。僕もそれはすごく分かる。「『残念』という言い方の中にもものすごい愛情がある」ということがやりたかったんですよ。

僕がさつき「使われ方がちよつと変わっている」と書いた「残念」は、この引用に書かれているようなものだ。井上が「悪気のある言い方じゃないですよ」と断っていることからわかるように、この言葉には微妙なニュアンスがある。

最近、こうして形容詞的に「残念」という言葉が使われるのをあちこちで見かける。しかも否定的な意味のときもあるけれど、「残念なイケメン」とか「残念な美人」みたいに、相手の欠点をチャームポイントのように暖かく受け入れるものが多いようだ。

「残念」から新しい文化へ

ついでに書いておくと、『デジタル大辞泉』（小学館）に載っている「残念」の意味、つまり辞書的な意味は次のようなものだ。

①もの足りなく感じること。あきらめきれないこと。また、そのさま。「—なことをしてくれた」

②悔しく思うこと。また、そのさま。無念。「負けて—だ」

井上が右のインタビューで言っているのは、宮藤が口にした「残念」というのは、こういう辞書的なネガティブな意味合いを超えたものだったということだ。辞書的な意味に捉える人もいるかもしれないけど、だから井上は「全国ネットの公共放送で『残念』という感じを言っても、宮藤さんの書き方だったらちゃんと伝わるんじゃないか」と、慎重さを感じがわせるエピソードを語っているわけだ。

実は以前にも「残念」という言葉が流行語になったことがある。2004年にコメディイアンの波田陽区はた しょうくが、自身の漫談のオチの台詞として「残念!!」という言葉を使って、大人気となったのだ。そしてこの年の年末、「残念!!」はユーキャンが実施している新語・流行語大賞でトップテンに入っている。

もう少しだけ詳しく書くと、この漫談は世間で流行している事象や人物を取り上げつつ、最後にチクリと皮肉めいた一言を述べるというものだった。「残念!!」という言葉はそこで登場する。つまり、先ほどの井上剛が言っていたような「ものすごい愛情がある」というようなニュアンスではなかったし、形容詞的に使われているわけでもなかった。要するに

辞書通りの「残念」という言葉が持つ、ネガティブな意味で使われているのである。

だが、それから10年ほど経って、大ヒットしたNHKの朝ドラでキーワードにされるほど、「残念」という言葉の意味は変わった。

断つておくと、もちろん、「残念」という言葉が全く従来のようなネガティブな意味で使われなくなった、ということではない（当たり前だ）。

しかし、新しい使われ方が増えてきた。そしてその、新しい使い方をする人たちに、僕は何だか次の時代というものを感じている。

僕がこの本で言いたいのは、その変化が起きたのが、まさに2007年前後なのではないか、ということだ。

その例を今から紹介していこうと思う。

まずは「残念」という言葉の使われ方が、ここ10年間でどのように移り変わっていったかという話から始めよう。

目次

はじめに 3

若者文化なんてどうでもいい 3

若者と流行、そして若者文化 5

若者は流行を作り出さない？ 7

なぜ2014年に2010年代を語るのか？ 9

「残念」の使われ方が変わっている 16

「残念」から新しい文化へ 18

第一章 ネットが失望される時代

29

過去10年で「残念」という言葉が最も検索された時は？ 30

リア充にとって「残念」とは何か 32

大人たちは日本のインターネットに絶望する 34

日本のネットは2009年までに「残念」化した 37

ニコ動ⅡサブカルチャーⅡ残念 39

ニコニコ動画にはとにかく若者が多い 40

新しい若者文化としてのニコニコ動画 42

2007年から伸び始める「残念」 44

千原ジュニアの「残念な兄」 45

少しずつ変わっていく「残念」のイメージ 47

ニコ動における「残念」 49

清濁併せのむ「残念」の思想 51

「残念」な人々が担う、「残念」な文化 53

第二章 ボーカロイドの何が語られないのか

ボーカロイドとは何か 56

第三章

内面と演技

79

なぜボーカロイドを「残念」な文化の筆頭として語るのか 57

ボーカロイドは既に社会へ進出している 58

初音ミクは力石徹ではない 60

初音ミクはアニメや漫画のようなキャラクターではない 63

ネギを持たせるという「残念」な改変 64

二次創作の対象としての初音ミク 66

初音ミクの二次創作は連鎖しているか 68

自由さの象徴としての「残念」 70

初音ミクは物語を伝えるシンセサイザー 73

初音ミクの解釈をめぐる断絶 75

ライトノベルの盛況 80

売れるライトノベルは「残念」 81

「残念系」を名乗るライトノベル 85

隣人部Ⅱ 残念な部活動 87

なぜ『僕は友達が少ない』にはモンハンが登場するのか 90

「友達を作る」ために「演技」する 92

なぜ内面は重視されるようになったか 94

日本の教育制度と内面重視の関係 95

学校で生きられない個性としての「残念」 97

「演技」が近代的主体を更新する 99

第四章

二次元とキャラ

105

アイドルは今のポップカルチャーで無視できない 106

今のアイドルシーンは2007年に作られた 107

Perfumeとはどんなアイドルか 109

堂々と口パクをするアイドル 111

第五章

あなたはオタクではない

Perfume が口パクをする理由は？ 113

「歌っている」演技をするパフォーマンス 115

「歌ってみた」「踊ってみた」が二次創作の要 116

ニコニコ動画に親和性の高い Perfume 118

Perfume はコントロールされていない 120

アイドルと自由さ 122

アイドルは2007年から変わった 124

アイドルの代替可能な「キャラ」 126

キャラ芸人と「残念」 128

今は「オタクの時代」なのか？ 132

岡田斗司夫の望んだオタク像 134

オタクは2004年にブームとなった 136

「オタク族」から「オタク文化」へ 138

集団としてのオタクの死 140

オタクは「残念」と同じか 142

オタクもサブカルも同じになった 145

「残念」によって不安な時代は訪れなかった 147

オタク族は世代的にしか成り立たないものだった 148

モテキと電車男は同じもの 150

「残念」という感性のあり方とは 152

第六章

我々が知らねばならないこと

インターネットも変化する 156

変化に気付きにくいインターネット 158

2ちゃんねるに夢を見る人が多かった 160

ネットにおいてもすべては変わっていく 163

終章

秋葉原通り魔事件の記憶 165

犯人の動機分析は間違っていた？ 167

キャラとしての女性コンプレックス 168

「残念」なキャラを奪われた犯人 170

「残念」を理解しないと犯人の心理はわからない 172

『黒子のバスケ』事件との違い 173

やはり動機の分析を否定する犯人 176

動機を「残念」から考える 177

変化に鈍感な人々 179

残念な日本の私

181

2010年代の「残念」 182

さやかちゃんはなぜ「残念」なのか 184

Negicco が叫ぶ「やんねーん!!」 186

「かわいらしく怒る」ための「残念」 189

「残念」から社会問題を考える 190

理解のできないもの || 新しい若者文化 192

今、ここにある「残念」 194

あとがき 198

主要参考文献 202

第二章

ネットが失望される時代

過去10年で「残念」という言葉が最も検索された時は？

「残念な」というフレーズは、この10年でどのように使われて来たのだろうか。

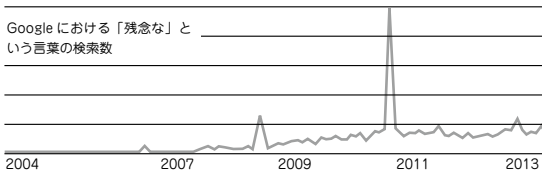
序章で書いたように、この言葉は以前よりもずっと好意的なニュアンスで使われるようになった。この章の目的は、それがどういう経緯だったのかを確認することだ。

ただし、これも序章で書いたとおり、僕が言いたいのには「残念」という言葉の意味が完全に変わったということではない。あくまでも従来通り、ネガティブな意味で使われながらも、そうではない使用法が多く見られるようになったということである。まあ、当たり前のことだ。

しかも、ネガティブに使われた例には、ひととき目立ったものがある。たとえば検索エンジン Google における「残念な」という言葉の検索数が、2004年1月から2013年末まで、つまり過去10年間で最大になったのは2010年の8月のことだ。これはなぜかという点、ちょうどこの時期にビジネスコンサルタントの山崎将志やまざきまさしが書いた『残念な人の思考法』（日本経済新聞出版社、2010）という本が34万部のベストセラーとなつて、この本のことをネットで調べる人が急激に増えたからだ。

この本は、僕が序章から書いているような好意的なニュアンスで「残念な」という言葉

Google における「残念な」という言葉の検索数



を使った本ではない。「残念な部下にならないために上司視点で考える」とか「仕事において『凶々しさ』は善である」といった、ビジネスマンのための思考法マニュアルというべきものだ。つまり読者に、「残念」な人になってはいけないよ、と説くための本なのである。たとえば、こんな一節がある。

役職が上になるにつれ、女子社員から「二人きりで相談したいことがあるから時間を作ってほしい」などと言われることが増えてくる。これだけなら特に問題はないが、

「○○さんの力になりたいので、私にできる仕事だったら何でも声をかけてください」「○○さんのことをもっとよく知りたいです。今度食事に連れて行ってください」

などと囁かれ、この部下はひょっとして自分のことが好きなのだろうか、と想想してしもうような積極的なアプローチを受けることもしばしばあるはずだ。

自分のことが好きだから近寄ってくるのか、それとも上司の受けはよくしておいたほうが自分のため、と想想して接近してくるのか、簡単には判別がつかない。まれな例かもしれないが女子社員の中には、上司に甘えた顔をして骨抜きにし、自分の欲望をすべて通している猛者もいる。

女子社員が上司に恋愛感情など持っていないことは、周囲から見れば一目瞭然だ。しかし、彼女にアゴで使われている上司当人は、舞い上がっていて本当のことは見えていない。そんな状況に陥ってしまったとしたら最悪だ。部下から尊敬を集めつつ、組織を率いていくことなどできないだろう。なにしろみんなに鼻で笑われているのだ！

要するに、ここで著者の山崎は、女子社員に言い寄られたからと言って自分が恋愛対象になっていると捉えるのが「残念な人の思考法」であるから、そういう考え方をしてはいけませんよ、と読者を諭している。

僕に言わせれば、そもそも働くための職場があり、そこで管理職に就き、女子社員の部下までいて、しかも食事を共にしたいなどと誘われてる時点で「残念」どころか人生の勝ち組、リア充そのものだと思ってしまうのだが、山崎からしてみれば、そんな奴はもはや、この本が想定する「残念」な人よりもさらに下、底辺以下の存在であるに違いない。

リア充にとって「残念」さとは何か

この本には他にも、「残念な人が書く」御社に運命を感じる「みたいな履歴書は、合コン

後に女性から来る積極的なメールに似ている」など、興味深いたとえ話がいくつも掲載されている。

ともかくこれが34万部売れているのだ。だからやはり、一般的には「残念」という言葉がネガティブな意味で使われるケースのほうが多いのは間違いないし、それが当然のことだろう。前述のようにGoogleの検索数を見ても、過去10年間で「残念な」という言葉が最も検索されたのはこの本が話題だった頃なのだから。

また『残念な人の思考法』が出る前年の2009年の6月にも、ネット上でネガティブな意味合いで「残念」という言葉が使われたことがある。IT企業経営コンサルタントの梅田望夫^{つめだもちお}が、ニュースサイトのインタビュで「日本のWebは『残念』と語ったのだ。梅田は2006年2月に著書『ウェブ進化論』（筑摩書房）を出版し、これは40万部を超えるベストセラーになっている。「本当の大変化はこれから始まる」というサブタイトルが付けられており、当時のネットでかなりの流行語になった「ウェブ2.0」が起こすとされた革命について書かれている。要するに「インターネットの力で、この先すごいことが起こるぞ」という内容の本だ。

大人たちは日本のインターネットに絶望する

梅田が同書で主張したことは多いが、簡単に言えばネットのおかげで個人が大企業に属さなくても手軽に表現活動や起業を行えるようになる、という考え方が根底にあった。

これは僕が序章で引用した『ユリイカ』のコラムと同じく、この先に起こることについて語ったもの、予言だったと言っている。

しかし、梅田の予言は当たらなかつた。『ウェブ進化論』が説いた未来は、少なくとも梅田自身が望むような形では訪れなかつたのだ。だから彼はそれを「残念」だという。

件のインタビュー内では、「残念」という言葉は次のように登場する。

とはいうものの残念に思っていることはあつて。英語圏のネット空間と日本語圏のネット空間がずいぶん違う物になっちゃったなど。

つまり彼は日本のネットが英語圏と同じような「進化」をたどると期待して『ウェブ進

化論』を書いた。しかし、そうならなかった。それは残念な状況である、というのだ。

ただ、そもそも梅田の予言自体が、日本の実情に即したものではなかったという意見も多い。『ウェブ進化論』が出版されてから、そうした批判はいくつも見られた。編集者の中川淳一郎は『ウェブはバカと暇人のもの』（光文社、2009）という本で、梅田に代表される「ネットが社会を変える」という主張を、ウェブサイト運営者の立場から次のように批判している。

「コンサルタント・研究者・ITジャーナリスト」は、あくまでもポジティブな「すごい人」「すごい技術」「理想的な使われ方」「ネットがもたらしたフェアな言論」「トップクラスの人々による鋭い意見」を紹介しているわけで、間違ったことは何も言っておらず、すばらしい意見であり、分析である。

だが、運営当事者からすると、「その原理や理屈はわかるけど、現実的にはさあ……。そもそもうまくいかねーんだよな……。あくあ、オレも理想論を語りたいよ。成功ケースのみを語りたいよ」と途端に歯切れが悪くなってしまう。

私たち運営当事者が相手にしているのは、善良なユーザーがほとんどではあるものの、

「荒らし」行為をする人や、他者のひどい悪口を書く人や、やたらとクレームを言うてくる「怖いユーザー」や、「何を考えているかわからない人」「とにかく文句を言いたい人」「私たちを毛嫌いしている人」も数多い。

いや、暴言を吐いてしまうと「バカ」も多いのである。

(中略)

そして、タチの悪いことに、この「バカ」の発言力がネット上では実に強いのである。

ところが中川のこの批判は、よく読むと梅田の主張を必ずしも否定していないのがわかる。むしろ中川は、梅田の言う「理想」こそが本来あるべき姿なのに、日本のネットには「バカ」ばかりがいるからどうにもならない、と言っているようだ。

つまり中川も、やはり梅田と同じように日本のネットを、ネガティブな意味で「残念心」だと感じているということになる。だからこそなのか、梅田は件のインタビュで、自分に対する中川からの批判を肯定的に評価している。要するに、批判している側も、されている側も、どちらにせよ今の日本のネットには不満なのだ。

日本のネットは2009年までに「残念」化した

梅田の実感に即して言えば、彼が『ウェブ進化論』を出した2006年2月にはまだ日本のネットには希望があつたわけだ。「本当の大変化はこれから始まる」というサブタイトルからは、将来に対する並々ならぬ期待が感じられる。

ところが、それから3年後、このインタビュ어가掲載された2009年6月までの間に、日本のネットは「残念」な状態になってしまった、ということになる。

しかし、ではこの時期にネットで、梅田が「残念」だと思ふような、どんなことが起きたのだろうか？

パッと見て目立っているのは、『ウェブ進化論』が刊行された2006年の年末に、今や日本発の動画配信サイトとして多くの人が知るようになった「ニコニコ動画」が開設されていることだ。

動画配信サイトというのはつまり、誰でも簡単にネットへ動画を公開することのできるサイトのことだ。梅田が期待したように、個人が、手軽に、自由に、表現を行える新時代のインターネットを代表するサイトだと言っている。

ちなみに世界的に有名な動画配信サイト「YouTube」は『ウェブ進化論』のちょうど1年前、2005年2月に開設されている。ニコニコ動画は当初、このYouTubeの動画に対してコメントを付けることができるサイトとしてスタートした。要するにYouTube上にある動画を二次使用して、視聴者同士で、動画の内容にツッコミを入れたり、茶化したりできるというサービスだったのだ。

しかしニコニコ動画は予想以上に人気となったので、ほどなくYouTubeから動画の二次使用を禁じられる結果となった。

そこでニコニコ動画はコメントを付けるための動画を投稿できるサービスとして生まれ変わる。

動画をユーザー自身が公開し、それを見た視聴者がコメントでツッコミを入れる。場合によってはユーザー同士が協力して映像に面白いコメントや字幕を付けたり、あるいは動画をダウンロードしていい感じの音楽を付け、投稿し直す。ニコニコ動画は次第にこうしたユーザー同士の創作コラボレーションを啓発するサイトとして成長していった。

これについては次章でもう少し詳しく触れよう。

ニコ動⇨サブカルチャー⇨残念

ともあれ、こうしたニコニコ動画の発展については、梅田の先ほどのインタビュでも、インタビュアーが指摘している。インタビュアーとしては、日本のネットが「残念」とこぼす梅田に対して、ニコニコ動画では人々が表現活動を活発化しているのではないかと論ずる狙いがあったのだろうか。

しかし、これに対して梅田は次のように答える。

サブカルチャー強いよね、日本は。それも全然否定してないよ、日本のサブカルチャー。日本発グローバルでさ。ただ僕自身がサブカルチャーはそんなに……。僕は漫画読まないしアニメもないしさあ。志向性がちがうだけで。

日本のサブカルチャー領域でのWeb文化の隆盛は十分に分かっていて、敬意を表しています。だから、今さらそういう事例について議論しても、日本のWeb文化が特に変化したとは思えないんだよね。

ただ、素晴らしい能力の増幅器たるネットが、サブカルチャー領域以外ではほとんど

使わない、“上の人”が隠れて表に出てこない、という日本の現実に対して残念だという思いはあります。そういうところは英語圏との違いがものすごく大きく、僕の目にはそこがクロースアップされて見えてしまうんです。

右に書いてあるのはつまり、ニコニコ動画に象徴されるサブカルチャーに敬意は払っているものの、自分がネットに望んでいたのはそれではない、ということだ。逆に言えば「残念」になっていった2006年から2009年までの間、日本のネットではネットを利用したサブカルチャー表現がズバ抜けて育っていったということになる。

ニコニコ動画にはとにかく若者が多い

だが梅田の解釈は少し正確とは言えないところがある。日本のネットでサブカルチャーが伸びて、それ以外のジャンルがうまくいかなかったのはその通りだが、少なくともニコニコ動画に関して言えば、単純にジャンルとしてサブカルチャー、とりわけ漫画やアニメが人気だから、他のジャンルが伸びないのだ、とは言えないところがあるのだ。

というのも、2011年にネットでは有志が行った調査によると、ニコニコ動画は現在、

圧倒的に若年層向けのウェブサイトになっているからだ。この調査はニコニコ動画の動画に付けられたコメントを1000個選び、それぞれのコメントを行ったユーザーを追跡するという形で行われている。その結果、単に動画を視聴しているユーザーの構成比は10代が20・9%、20代が45・5%、30代が21・9%、40代が11・7%だったという（引用元：<http://datadeno.net/ip/gen256/20111105/1320503106/>）。

これだけなら「若い奴が多いと言っても20代が一番多いのか。30代も20%以上いるし、まあそんなもんだろ」と思っても不思議はない。だが、動画に対してコメントを付けているユーザーの構成比を調べると、実に75・9%が10代だったというのだ。しかもそのうち半数近くが中学生、ついで多いのが小学生だという。

動画を見ているユーザーの年齢層が幅広かったとしても、ニコニコ動画を特徴付けているのが動画に付けられるコメントなのは間違いない。言ってみればニコニコ動画の雰囲気を作っているのは、小中学生が中心だということになるだろう。

新しい若者文化としてのニコニコ動画

この結果には傍証となりそうな統計がある。同じ2011年にリクルートが実施したアンケートによると、高校生でニコニコ動画を利用しているのは64.2%、そのうちほぼ毎日動画を見ているのは39.1%だったという。

ニコニコ動画は会員制のサイトで、ユーザー登録をしないと動画が見られないという若干めんどろな仕組みになっている。それでも半数以上の高校生たちがわざわざユーザー登録をして、ニコニコ動画を見ているというわけだ。さらに2012年に実施された日経BP社による別の調査によると、20代では8割超が利用しているという。

「アニメや漫画が多いから、若者が多いのは当たり前じゃないか」と思う人もいるかもしれない。しかし、だからといって単純に「日本のネットはサブカルチャーが人気」とだけ言えば済むというものではないだろう。

つまりニコニコ動画は、単にサブカルチャーに傾倒したサイトだというだけでない。そこには明確に若者が集まっていて、若者が先導するような動画コンテンツが集まっているということになる。

言ってみれば梅田が「残念」だと言ったのは、日本のネットが若者たちが表現活動をするような媒体になって、しかもそれが圧倒的な存在感で社会に浸透を始めてしまったということだった。彼はそれを単に「サブカルチャーが強い」という程度に捉えたが、実際には日本のネットには、無視できない規模で若者たちが台頭してきた、ということになる。

ともかく日経BPによるとニコニコ動画の総会員数は2012年4月末時点で2725万人に達しており、「この規模感是国内携帯電話事業者3位のソフトバンクモバイルや、大手量販店であるヤマダ電機のポイントカード会員数などに匹敵する」のだという。

そうした潮流が生まれたのが、梅田が『ウェブ進化論』を出してから「残念」と音を上げるまでの、2007年前後という期間だったというわけだ。

その文化の具体的な中身がどういう特徴を持ったものかということについては、次章以降に譲りたい。ここでは、少なくともそれが梅田の望んだ成長とは別のものだったということだけを確認するに留めよう。

2007年から伸び始める「残念」

しかし、この本を読んでいる人の中にも、梅田と同じように、そうしたアニメや漫画の盛況をネガティブな意味で「残念」だと考える人はいるだろう。ひよっとしたら、梅田を批判した中川淳一郎もそうだったかもしれないし、『残念な人の思考法』を書いた山崎もそう思うかもしれない。

ところが不思議なことに、まさにこの頃から「残念」という言葉自体が、ゆっくりとポジティブな使われ方をするようになっていくのだ。

たとえば『残念な人の思考法』のヒット以後に山崎は、『残念な人の仕事の習慣』『残念な人の英語勉強法』『残念な人の逆襲』『残念な会議の救出法』『残念な人のお金の習慣』『残念な人の口ぐせ』など、「残念」シリーズの本をとにかく次々に著している。『残念な人のゴルフ思考法』なんて本まである。残念な人はゴルフのやり方まで「残念」だというのだから、なかなかすごい。

しかし、これらの攻勢によって「残念」という言葉がどんどんネガティブな意味合いを

強めていくかということ、そうではない。

Googleを見ても、「残念」という言葉の検索数は『残念な人の仕事の習慣』が刊行された2010年には飛躍的に伸びたが、その後はかつての水準まで下がっている。

むしろ検索数の推移をグラフで見ると、同書の刊行時期を唯一の例外として挟みながら、検索数はただ一定のペースで伸びていつているように見える。

より正確に言うならば、2004年1月から2006年の暮れまでは検索数はゼロに近いが、2007年から現在までは似たような伸び率で検索数が上昇しているようだ。

千原ジュニアの「残念な兄」

ではその2007年から、なぜ「残念」という言葉が伸び始めたのだろうか。

Googleはウェブサイトにその言葉が登場した日付を指定した検索ができるので、検索範囲を2007年に絞って、当時どのような形で「残念」という言葉がネットに書かれたのかを調べてみた。

それによると、やはり当時はまだ、ほぼすべての場合において「残念」という言葉はネガティブな意味合いで使われていたようだ。

しかし、かろうじてネガティブとは言い切れない例としては、2007年の8月15日に掲載された、「千原ジュニアが、『残念な兄』千原せいじについてコメント拒否!？」というニュース記事が見つかった。

これは、お笑い芸人の千原ジュニアが、同じく芸人の兄、千原せいじを「残念な兄がおりました……」と呼んで、兄のちょっとダメで面白いエピソードを紹介するという、定番のネタにちなんだ記事だ。

ここで千原ジュニアが言う「残念な兄」とは、「どうしようもない兄」というネガティブな意味合いだが、しかしそれは兄のことを面白おかしく語る笑いのネタでもある。しかもダメな兄のことを面白おかしく語るといえるのは、同じお笑いのネタでも、序章で紹介した波田陽区の「残念!!」とは少し違った、笑う対象に対する積極的な好感が感じられる。

千原ジュニアの使った「残念」という言葉は、そういうニュアンスのものだった。

千原ジュニアはお笑い特番「人志松本のすべらない話」で、この「残念な兄」のネタを頻繁に披露していて、いわばこの番組での彼の持ちネタになっている。

ちなみに同番組はこのニュース記事が掲載されるまでに、たびたび放映されて人気の特番になっており、2007年6月のゴールデンタイムに放映された回は関東地区で14・7

%、関西地区で24・6%の高視聴率を記録していた（ビデオリサーチ調べ）。こういう人気番組の影響によって、「残念」という言葉に、わずかだがポジティブな意味合いが生まれたという可能性はあるだろう。

少しずつ変わっていく「残念」のイメージ

とはいえ、2007年から「残念」という言葉の検索数が伸びたのが、ポジティブな意味で使った例が増えたせいかどうかは、最終的には突き止めようがない。

しかし2007年というのは、まさに梅田が「日本のネットが残念になった」と指摘した2006年から2009年までのあいだにあたる。その時期に、Googleの検索数においても「残念」という言葉が伸びていったというのは、なかなか面白い符合だ。

しかも、2008年以降はポジティブな意味での「残念」という言葉の使われ方は、もうちょっとずつ増えていく。

たとえば、先ほどの千原ジュニアの例に続けて見つけることができたのは、2008年3月に大型掲示板「2ちゃんねる」に投稿された、次のような文章だった。

(中略)

彼氏が出来たら変わると思うんだよね。

悪循環なのかなあ。

吐きそうだよ。

残念な美人とか残念なイケメンはやっぱモチないみたいだし、顔が不細工で中身が残念な私は一生誰からも好きになっではもらえなさそう。

告白されたなんていいな。羨ましいよ。

私なんかこの二年半何もないよ。

悲しい。死にたい。

一見してわかるように、この投稿は基本的に「残念な美人とか残念なイケメン」のことを、肯定はしていない。しかし慎重に読むとわかるのだが、「顔が不細工で中身が残念な

私」よりも優れた者として書いているのがわかるだろう。

書かれている内容は彼氏のいない女性の切実な悩みで、読んでいるとかなり深刻なものを感じさせる。しかしどことなく「残念」という言葉がポジティブなものに変わっていき、過渡期の雰囲気があるのだ。

ニコ動における「残念」

「残念」という言葉が肯定的に捉えられていく課程は、このくらい、ほんのちよつとずつの変化の繰り返しでしかなかった。だが検索結果を細かく見ていくと、「残念」という検索結果の増加に合わせるようにしながら、明らかに肯定的な使用方法が増えていく。

さらに面白いことに、梅田が望まなかった「残念なネット」の代名詞のようなニコニコ動画でも、ちょうど2007年前後に「残念」という言葉が目立って使われるようになっていく。それも、ポジティブな意味でだ。

これは実際にサイトで確認できる。というのもニコニコ動画には、ユーザーが自分たちの好きな言葉について自由に解説を書くことができる「ニコニコ大百科」という百科事典があるのだ。いわばネット上の百科事典「ウィキペディア」のニコニコ動画版である。

そして、このニコニコ大百科が開設されたのは2008年5月12日だが、6月1日には既に「残念な美人」という項目が作られている。そこには次のように書かれている。

残念な美人とは、美人でありまた残念である女性の動画に付与されるタグの一つ。

声優では、小林ゆうがこのように呼ばれることがある。

または、アニメ『とある科学の超電磁砲』の登場人物「木山春生」の事。

ここでは前者の説明をしている。

〈概要〉

どのような女性かは、動画閲覧時のインパクト保持のため、ここで語ることはできない。とりあえず関連動画を見てほしい。言葉では言い表せない「ときめき」を感じてくれると思う。

声優だとかアニメだとか、いかにも若年層向けのような、若者が書いたものらしい記述がされているのがわかる。文章もどこか稚拙だ。「残念な美人とは、美人でありまた残念で

ある女性」という説明は同語反復的で、何も説明していないに等しいと思う人もいるかもしれない。たぶん、この文章だけで眉をしかめるといふ大人もいるだろう。

まあ言い換えると、洗練されていない、粗雑で雑多な感じが、いかにもサブカルチャード的だと言うこともできる。これらの文章を書いているのは中川淳一郎が「バカ」と書いたような、きつとニコニコ動画でも動画に批判的なコメントを付けまくったりしているような、全く善人ばかりとは言い切れないような人々なのだ。そして、おそらくは年齢も若い。

清濁併せのむ「残念」の思想

ちなみに、ニコニコ大百科には「残念なイケメン」という言葉も登録されている。そこには次のように書かれていた。

残念なイケメンとは、イケメンであることが台無しなイケメンの事である。

〈概要〉

せっかくのイケメンでありながらも、その容姿に全くそぐわない趣味や性癖を



ニコニコ大百科で言及されている木山春生とは、一見するとクールな科学者といういでたちでありながら、その実「暑いから」などの理由でどこでも服を脱ぐような予測不可能な行動を取るキャラクター。ニコニコ大百科のキャラクター紹介にも「残念美人」との記述がある。図は彼女が描かれたBlu-ray 第4巻のジャケット。

持ったり、イメージが崩壊するような言動をしたりと、イケメンであることがもつた
ないイケメンをこう呼んだりする。

だが、むしろイケメンであるからこそ許される、もっとやれという気が起ころとも考
えられる。また、ただのイケメンより親しみやすさが感じられることもあり、人によつて
は褒め言葉になる場合も。

こちら「残念な美人」と似たり寄ったりだが、語の説明としては少しだけわかりや
すいかもしれない。

ともかく、これらの説明には、もはや、「残念」という言葉にかなり肯定的なニュア
ンが込められていると言つていいだろう。「言葉では言い表せない『ときめき』だとか、
「ただのイケメンより親しみやすさが感じられる」というのは、「美人」や「イケメン」の
「残念」さを是々非々に受け入れる態度が窺える。

「残念な美人」とか「残念なイケメン」という言葉は、普通に考えれば「美人」と
か「イケメン」という、人並み優れた長所を持つているにもかかわらず、「残念」という、

それを打ち消すような短所がある、という言葉だろう。

だが右に挙げたニコニコ大百科の説明は、その矛盾したものを合わせ持つ状態を全体的に、長所として認める姿勢で書かれている。

図式的に書くと次のようになるかもしれない。

① 一般的な理解……「残念」(短所) + 「美人」(長所)

② ニコニコ大百科の解説……「残念 + 美人」(長所)

おそらく序章で紹介した『あまちゃん』の例にある「残念なお土産」というのも、同じ感覚で「残念」という言葉を使ったものだったのではないだろうか。

「残念」な人々が担う、「残念」な文化

さてこれで「残念」という言葉がどんな変化を見せたかは、だいたいわかりそうだ。

まず、2006年から2009年までの時期、日本のインターネットには梅田望夫や山崎将志のような人々が、あまり好ましいと感じない変化が起きていた。

それはニコニコ動画に代表されるような、大人からしてみれば幼稚なサブカルチャーが盛況を迎えてしまったことに象徴されており、彼らはそれを「残念」だと感じている。

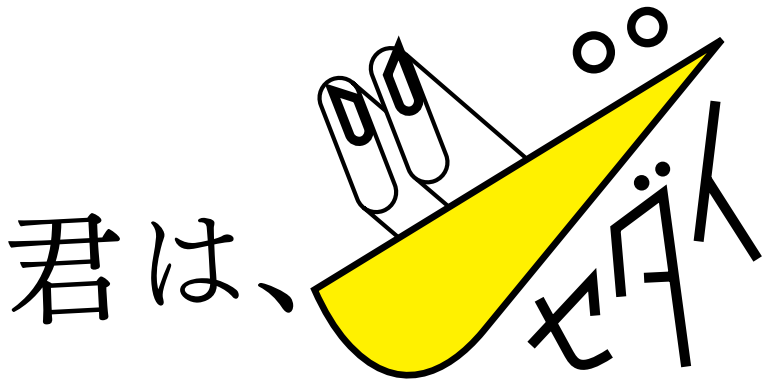
しかし同じ時期、その「残念」な日本のインターネット上で、まさに「残念」という言葉の使われ方そのものが変化していった。人々は次第に「残念」という言葉を肯定的なニュアンスで使うようになったのだ。そしてGoogleの検索数に顕れているように「残念」という言葉の日常的な使用数じたいがゆっくりと増えていく。

梅田たちから「残念」と呼ばれたような人たちが担う、むしろ「残念」さを好む文化が、特に若年層を中心に日本では広がっている、というわけだ。

では、そこで生まれている表現はどのようなものなのだろうか。「残念」という言葉が本来持っているネガティブさにふさわしい、唾棄すべき無様なものなのだろうか。

もちろん、本書がするのは「そんなことはない」という話になる。

次の章からは、その「残念」な若者文化がどのような内容を持ったものなのか、具体的に見ていこう。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ
イベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、未来アポ付きスタートアップインタビュー！

ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!